

『生きた言葉』

～詩的分析の試み～

感動のない言葉は
まるで翼がない飛行機のように
空気力学的な創造性に欠け、
慎重に組み立てられただけの怪物

生きた言葉は
飛ぶ鳥のように
素早い動きと、ぴんと張った翼で
われわれを新たな高みへと持ち上げる

詩はまだ見ぬ世界への飛躍の手段
靈感を得た言葉は我われに
詩人の心は、地を這うためにあるのではなく
飛ぶためにあると
ささやく

- アンドレイ:** (書店のカフェでウーロン茶をゆっくり飲みながら、最近の詩の朗読会の余韻に浸っている) 「詩とは何か」について、本当に多くの詩人が書いているよね。僕の結論は、詩は解釈なしの方がいい、ということなんだけど。
- ティン:** (頭をかしげて思案しながら) 確かに、それは抽象性を増すわよね。説明が多すぎると、しばしば新鮮さが失われてしまいます。ホタルをボードにピンで留めて理解しようとするようなものねー知識は得られるけど、光は失われてしまう。
- 玲亜:** (優しく笑いながら) 詩人の多くは、自分の技術について思いを巡らせるのが好きなんでしょう? 詩について詩を書くことは、創造のプロセスそのものを振り返る機会です。こうしたメタな意識が作品に深みを与えます。
- ミン:** (突然、芝居がかった身振りで空気を嗅ぎながら) ああ、なんて香りの強いネギだ! フランベして胡椒を加える必要があるかな? そして運がよければ、思いがけない味に酔いしれることができる。
- アンドレイ:** (ジャックに笑いながら) あなたは本当に錬金術師ですね、詩的思考を料理の比喩に変えてしまう。でも、君の言うことには一理ある。おそらく秘訣は、あまり考えすぎず、もっと感じることに、プロセスを信頼し、あなたが振り返るかどうかにかかわらず、詩が独自の道を見つけるままに任せることなのだろう。最も力強い詩は、理解されることを求めるだけでなく、体験されることを要求するのだ。

- T Newfields (和訳: sugurunyan, ronpei, wanderer, Ishiguroo_oと神谷卓代と吉田典子)

開始: 1995年 静岡市 完成: 2025年 静岡市